

414

44

東西古織錦繡鑑解說

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





世界織物史概観目次

一 總説

二 織物原料の史的考察

- A 麻類に就て
  - B 羊毛に就て
  - C 絹に就て
  - D 木綿に就て
  - E 金絲銀絲等に就て
- 三 織物發達の道程に就て
- A 紀元前の埃及ミ希臘の織物
  - B 羅馬の織物
  - C コプト織
  - D 秘魯織物
  - E サツサニアン織物

F 波斯ミ土耳其の織物

G 亞刺比亞及び回教國の織物

四 模様染の發達

- (イ) 臘纈(蠟纈)に就て
- (ロ) 絞模様染(纈纈)に就て
- (ハ) 纈纈(板締法)に就て
- (ニ) 木版更紗に就て
- (ホ) 經糸模様染の織物に就て

五 極東の織物

- A 印度及びその附近の織物
  - B 支那日本及び其附近の織物
- 六 近古の歐洲各國の織物





# 世界織物史概観

## 一、總 說

明 石 染 人

人類文化の過程に吾人が常に注視を置いてゐることは各種族の間に深き交渉のあること、それが混和し消化して特異な發達を遂げてゐる現象の多いことである。それが特に藝術史である場合、著しく眼だつてくる。人間同志の風俗習慣、その生活、宗教、思潮、それ等が縦横に影響し合つて終に現今に到つてゐる。染織工藝史も勿論その例外では有り得ない。

世界の土代文化の中心地であり、その發祥地であつた埃及、希臘若しくは支那に就て之れを見ても時代を逐ふてその相互の間に何等の影響が無かつたか誰が言ひ得やう。更に吾人の考慮すべきは夫々の文明が東漸し西移するには諸種の蠻地なり他の領土を通過し、それ等の人手を濾過せねばならぬことである。文明國の資財なり藝術が、より低い民度の土地に與ふる感化の威力は大いものである。同時に文明國が低い民度を有する國の獨特な、創造的な原始的の藝術を吸收する力も可なり強いものであらふ。かくの如く上代の埃及、希臘、支那の文明に介在し、啓發され、促進され、影響されたものが印度、波斯、アツシリア、バビロニア、ビザンチン、羅馬の文明であらふ。染織史の大勢もやはり斯の如く推移してゐる。試に上部埃及に住み基督教を信奉した純粹の埃及人であつて、三世紀前後に特異な紋織物を製産し埃及文明最終の炬火を點じたコプト及びコプト人の名稱は、穿鑿して見るに「埃及」の希臘語「ギプト」を更に亞刺比亞語で翻譯した言語で結局「埃及」と云ふことである。これによつても當時の埃及が希臘や亞刺比亞に影響されてゐることを如實に示してゐると云つてよい。

此種の實例を吾が染織史に求めても決して稀れではない。「絹」と云ふ言葉に就てもこれを例證することが能き。今より二千五六百年前に希臘人は支那及び支那人のことを *Serai* *Sera* *Serica* 等の名を以て稱んでゐた、この語源は十七八世紀頃の學者の研究によつて「絹を西方に送る民族」又は「絹の産地」としての支那を指してゐることが判つたのである。即ち絹の原産地であつた東方の大文明國支那より其特産品を當時邊境の大互市場であつた疏勒(現在の新疆省喀什噶爾市)を通じて隊商によつて西方の大文明國たる希臘若しくは波斯、埃及に輸出されたものであることが明白になつて來る、かくして希臘文明の系統をひける各國の言葉の中に絹の希臘語である *Serikon* を母體して大同小異の類音を以て發音せられてゐることは當然の歸結である。英の *seric* 獨の *Serie* 佛の *Serie* 伊の *Sera* 拉典の *Sericum* 悉くそれである。





此の意味に於て吾が染織史は各種の纖維織物の原料としての麻に就て、織物の組織に就て、染色方法や圖案、意匠の形式に就て、相互の深甚なる交渉や影響を研究する學問であるとも言ひ得られる。  
以下順次これ等に關する略説を試みる。

## 一、織物原料の史的考察

### A 麻類に就て

人類の最初に現れた織物原料は推理的にも、遺物から見ても、また文献を辿つても麻類であつたことは既に疑問の餘地がない様に思はれてゐる。人間が必然的な慾求によつて衣服を發明した時、即ち衣服の原始的形態は各々の地方により最も恵まれた手近かな自然物を採り來つて身に纏ひ、裝飾に利用され、木の葉、樹皮、藁、獸毛、鳥毛等が衣服の先驅をなしたものであつたことは茲に贅言を要せないが、更に人智が進歩して完全な衣服としての織物を見るに、強靱なしかも纖維の細い表皮を有する野生の草木である麻類が第一に吾々の祖先によつて見出されたことを信するが至當であらふ。

有名な埃及學者ゼ・イ・キイ・ベル氏によつて埃及サツカラ遺跡の墓地から發掘された(一九一一年十二月)世界最古である女鉢(三十五歳ばかりの)の本乃伊を卷いた粗、密三種の密度の異つた麻布は埃及第二朝即ち五千五百年前のもので現存の織物中これが最古のものとしてゐる。エリオット・スミス博士の説に従へば麻布の存在は埃及古代王朝第一朝(約七千年前)にまで溯ることが出来る。

右のサツカラ本乃伊以後古代埃及王國の末期である第十一朝に至るまで即ち今より五千年前の太古に於ける代表的な本乃伊には悉く麻の巻布を以て巻いてゐる。例へばメーダム木乃伊(ペトリイ博士一八九一年發掘)の如き、ベニハーン木乃伊(ガルスティング教授發掘)の如き、ギゼー木乃伊(ライスナー教授一九一三年發掘)の如きは單なる數例である。

ヘロドタスの云ふ所に従へば本乃伊に麻布を巻くことは埃及の宗教的儀令として法律の如くに定められてあつた様である。勿論貴賤貧富によつて本乃伊法及び巻布法に差異はあつたが平均三、四時幅の麻布に種々の防腐劑を浸ませ、且つ割れない様に貼附劑をつけ、皮膚に近きは組織の荒い、柔かい布を用ひ外部に從つて細密な布を巻き四百碼程の長さのものを使用し、あるものは土耳其赤(茜根)植物油を以て染めた)や藍色に染めたものなどを巻いてゐる。

五千年の永き歲月を経て今日尙ほ殘存してゐると云ふことは麻の永遠性、耐久性にもよるが、埃及の風土の乾燥と地中に埋没されてゐた關係であ

つて吾々にまつては得難い賜である。

言ふまでもなく太古のこの種の麻布には紋織もなく模様染もなく、無地或は色無地のものに限られてゐる。

麻及び麻系の存在はかくの如くにして確認されてゐるがその栽培に就て、その練糸、紡出の方法に就て或はその織法に就ても貴重な遺物の存することを逸する譯にはゆかない。

ベニハーン山のケティの墓は第十二朝(約五千年前)のものであるがそれに記録された紡絲及び機織に關する數個の圖はこれ等上代の工藝を如實に語るものである。紡糸の圖は男は坐し女は臺の上に立つて各々糸を撚り、手廻してゐる状態を示してゐる。機織の圖の一は四本の機脚を地に埋込み一人の裸体の男が篋を操作してゐる平機(織機)の圖で男の下には市松模様を表して組織を示してゐる。他の一つは立機で二人の女が機の左右から操作してゐる圖である。セイクセイドの墓石に彫られてゐる麻の種播きより收穫に至る過程及び牧羊の圖と共に染織史上珍重すべきものである。

何れにしてもこの原始的な太古にあつてかくの如く麻布の製法が發達してゐたのであるから當然その影響があつた譯である。即ちかくしてパピロンの傳はり、希臘に播かれ、羅馬に繼がれ、波斯に移殖され終に中世紀に及んで全歐洲に普及するに至つたのである。

石器時代既に麻が存して居り、しかも野生植物であるため各國共に織物の原始時代には期せずして麻織物を使用したことも注目せねばならぬことである。これを單に我國に就て考へても、神武天皇建國以前所謂神代に於て立派な麻布であるところのたへ(妙)の字を當て、荒妙、白妙など稱してゐる)が明白に存在してゐたのである。即ち約三千年は溯ることが格別な不合理ではない。恰も埃及の第二十朝末紀、波斯の爲めに攻略されてその屬國となつた頃に當たる。當時の波斯は隣邦埃及の古代文化に浴しこれを咀嚼し次第に勢力を増大し新興の希臘と共に東西に對立し、その國土固有の藝術は愈々光芒を放ち、陶器に、染織にその他の工藝品に燦然たる盛觀を呈してゐた時代であつた。

希臘の麻織物は最初大衆的な衣服(寬衣)に用ひられたものであるが紋織が行はれてからは羊毛と麻との混織が多くなり、紋織も簡單なる綴織を用ふることになつたのは何れも埃及の影響である。紋織に關しては後述のこととする。

印度、中央亞細亞諸國は云ふまでもなく、二千二百年前歴山大帝遠征以前に立派な文明があり麻織物の存在は畏らく埃及の原始時代と大差はないと思はれる。近時小亞細亞諸國の高地部の死都より發掘する、本乃伊の巻布を見ても判かること、思ふ、先年大谷光瑞氏の手によつて我國に將來された數例は無言の雄辯ではあるまいか。

### B 羊毛に就て

古き麻の歴史にも比肩すべきは絹及び羊毛であらふ。ヘロドタスの文献に従へば埃及人のカラスウルと稱する脚に達する長さ寬衣は麻織物である



が、その上に白毛織物を被つて居つたもので、寺院に詣づる時、神を拜する時、又は死屍を埋める時は絶対に被らなかつた、それは宗教的信念に基づくものであると書いてある。アプユリウスは毛織は羊からとつた穢らしいものであるが、麻は野からとる清浄な植物であるので埃及人の下衣に最も適したものであつたと記述してある。それ故毛織物は古きに於ては今より三千年以上に溯ることができ、基督教が出現して埃及人の思想が一變するまでは公式の場合には使用せなかつた形であつた。然し麻と羊毛との交織物はそれでも時勢の力を以て順次擡頭して終にコプト時代の染織黄金期の素地を培つたのであつた。

牧羊の業は埃及にも中央亞細亞地方にも石器時代よりあつたらしく、羊の原始種とも云ふべきオヴィスアンモン種は中亞の高地の原産であり、前記セイクセイドの墓石の牧羊の圖によつて知らるゝ如く埃及には普遍的なものであつた、たゞ然し羊の毛を剪つて衣服の料にしたのは何時の世であつたかは明確な文献がないのである。

中央亞細亞に發祥した毛糸が埃及、波斯に傳播し更に北漸して、希臘羊毛となり、羅馬羊毛となり、その秀でた文化によつて立派な織物が出来、天與の風土に恵まれて歐洲各地に擴がり三世紀初葉には西班牙の山中に優良なメリノ種を生み、順次發達し十六世紀に到つて歐洲全土争ふて牧羊を營み、毛織物を産し、終に歐洲文明人の常用の衣服は毛織物に限定さるゝの盛大を招いた。かくして十八世紀末期に及んで濠洲に移殖して大成功を遂げ今日極盛の源を築いたのである。

太古より印度北部の高地或は西藏には特種の山羊が棲息し、これによつて織られた毛織物は波斯の影響をうけた印度固有の花紋織である。(第二〇圖参照)支那に於ても絶無と云ふのでなく、ある時代には盛行されたらしく二千四、五百年を経た毛布すら現存してゐる。わが正倉院御物中にも縮絨があり當時奈良朝文化の一端を物語つてゐる。

たゞ茲に私の言ふべき事は幾千年前の原始的又はそれに近い時代には純然たる羊毛織物は極く稀であつてその多くは麻若くは木綿との交織物が多く、然かも紋織物として紋に毛糸を用ひ、縷織に毛糸を使ふたものが特に眼立つことである、それは勿論宗教的な潔癖から来るのではあるが少くも麻の普遍性に比して貴重視されたものであることを裏書きするのでないかと思ふ、依つて推定しては毛糸が織物原料の領域に達したのは事實に於て麻より遙か新しいことに屬すると思ふ。純然たる毛織物は近古歐洲に發達したもの以外、印度カシミール織にしても、西藏織にしても支那既にしても織物の本道に入つたものは左程上代のことでは無いのである。

### C 絹 に 就 て

絹に就ては羊毛の如く曖昧な歴史ではない。本論の初頭に云つた如く絹の希臘語であるセリコン (Serikon) 或はセレス (Seres) の示す如く支那の原

産である。私の推定では支那の中部、黄河に近き山東省に源を發したものであると思ふ。その文献の數例を擧げるならば、尙書禹貢篇(約三千七百年前のもの)袁州の條に「桑土既蠶」の文字があり青州條に「檠絲(蘇氏曰惟東夷有此糸以文爲檠、其堅異常、萊人謂文山繭)貢」を紋織のあつた記述をして居り史記にも「黃帝妃嫫養蠶」を記して居るのを見ることが新しくも四千年前に支那上流社會に養蠶が盛行してゐたことを知る。

希臘、羅馬の盛時に於てすら麻織物の縷織は中々珍重されたものであつたが既に支那では「野に咲ける花の色香にも似たる微妙なる衣服を支那人は織つてゐた」ミダイオニシアスは驚異の記述をしてゐる。アリストートル、ヴィルギル、ピリニアス等の希臘、羅馬の大史家は筆を揃へて支那の絹の高貴を賞め稱へてゐる。

上代支那の文明が、天山南路を遙か經て國際的大互市場たる疏勒(Seh)を通じて中央亞細亞、波斯、亞刺比亞、埃及、希臘に絹織物が流布した力は可なり強いものであらねばならぬ。最初紀元前五五〇年頃波斯の一僧侶がひそかに蠶卵を杖の中に仕込ませて支那から持歸つたこと云ふ傳説を泰西の學者は信じてゐる。そして波斯から希臘に養蠶の法を傳へたのは紀元前三二五年で歴山大帝の近東遠征のお土産の一つであつたミグラヂエル氏は其近著歴史の織物に述べてゐる。希臘、それから羅馬へは傳はつた養蠶、製糸の術は結局不成功に終り四世紀に至つて亡びた。羅馬で絹が珍重された例は、ヘリオグバラス帝が絹の上衣を初めて着たのが西暦二二〇年の頃で、七八〇年にはシャールマン大帝がメルシヤ王のオツファに二着の衣服を賜つたことなどが史上の逸話として遺つてゐるのを見ても判るであらう。

一方に於て支那の養蠶は秘密法とされてはゐるもの、唇齒の關係にある日本へは既に上代に傳はり、健全に發達を遂げ今日の如く世界一の絹主産國たる素地を築いた。そして十三世紀頃には再び歐洲に傳來し終に現在の佛蘭西、伊太利絹の因を播いたのであつた。英國へは一五八五年移殖を企てられたが飼育不適のため間もなくその跡を絶つたのである。

### D 木 綿 に 就 て

本綿の始源も古く、印度の太古の織物史は木綿に關することに全部を占めてゐると云つて差支はない。古梵語でカルバシと稱してゐたのを後にカバシと轉訛した。正確な記録はないが四千年よりも更に古く印度に栽培されたものらしく、二千四百年前には既に希臘に傳はりヘロドタスも「印度に野生する植物から、美しいこと、質の好いこと羊毛にも優る織毛を生じ土人は之れを衣服に織る云々」の記述をして居り、歴山大帝印度遠征の副産物としてこれを徹底的に希臘に知らしめ、二千年前頃の希臘戯曲の一節にもカルバシの織物(梵語カルバシの輸入語)と云ふ言葉も存して居つて、印度が發祥地であることは疑のない處である。

本綿が諸邦に傳はつたのは主としてアラビヤの隊商によつたらしく、紀元前二、三百年には既に地中海沿岸、小亞細亞に栽培が行はれ、一世紀の



初頭には埃及にも盛行し(史家ビレニアスの埃及記行)二、三世紀には紅海沿岸にも普及して来たのである。更に木綿の近代語としてのコットン(拉典 Cotton 西班牙 Queda 伊太利 Coton 佛蘭西 Coton 英國 Cotton 露西亞 Kotton ルーマニア Koton 獨逸 Katun)の語源はアラビヤ語の Katan であることを以てアラビヤ人の木綿傳播者としての活躍を想像することができる。

飄つて木綿が支那に傳はつたのは、綿糸又は綿布としては随分古かつたのであるらしいがその栽培法の傳はつたのは七世紀頃であつた。そして日本へは桓武天皇延暦十八年(西暦七九八年)に崑崙人が三河に漂着して、こゝで栽培法を傳授したと傳説されてゐるが、それは中絶して後陽成天皇の文祿年中に南蠻の交易船によつて再び輸入されて今日に至つたものである。それで我國の上代には木綿がない、我國唯一、最古の工藝博物館にも見るべき正倉院の裂地にも木綿はない、木綿を以てユウと讀ませるが、然しこれはコットンではないのである。

木綿の歴史に逸するこの出来ない事柄は、驚異すべき木綿の發達が歐洲人の全く未知の世界であつた亞米利加大陸に、しかも頗る古くから存在してゐたことである。それはインカ朝前のペルーに最も盛んに行はれてゐたことである、その歴史的正確さはないが、兎に角千二百年よりも尙ほ古く、亞細亞の何れの民族か、漂流若くは移住してその栽培を教へたもので、ペルー古來の文様と獨特に發達した文明の力によつて色彩美しい幾多の紋織物を作つたもので、現在續々海岸近き砂漠や藁地から遺物が發掘されつゝあるのである、一五三二年ピザロによつて征伐されたインカとして知られた人民は木綿織物ばかりでなく建築、土木、工藝、社會組織、經濟組織も確立した文明を以てゐたことは近時盛に論議されてゐる通りである。

最もそれ以前に一四九二年十月十二日にコロムブスが、亞米利加のパハマ島に上陸した時、恰かも綿の收穫の秋に當りその饒多にも美はしく白き棉花を見て驚きの余りその若干を持歸つてイサベラ女王に獻じたこと云ふ挿話は可なり有名なものであつた。

歐洲に於て一般的に需用される様になつたのは十世紀の末葉であり、十二、三世紀に涉り白耳義のバルセロナ、十四世紀に英國のランカシャーヤ一州に綿業勃興し、十七、八世紀には和蘭のアムステルダムなどが製造中心地となり、それ以後英國がこれに代つて覇を稱しつゝ、今日に及んでゐるのである。

### E 金絲、銀絲等に就て

金絲、銀絲が織物に使用されたことは余程古く、文獻としては舊約聖書中出埃及記に「金、藍、紫、緋色の糸を細き麻糸より織れる法衣を作り、金を打ちて薄き伸金とし細く切りこれ等の色糸と麻糸の中に織込む云々」とあり、絹や麻と交織して高貴な織物を作つたものであらふ。中古に至つて東洋では支那、波斯、印度、土耳其、及び日本、西洋ではサイプレス、シシリーの織物に金糸、銀糸を織込むものが多かつた。特に東洋諸邦のものは絹と交織し高級な錦などを織り出し近世に至つてゐる。

其他微細なる織物の原料を數へ舉ぐれば汗牛充棟も當ならぬ程多數あるが、何を云つても織物の原料の大宗とも云ふべきは麻類、木綿、絹類、羊毛の四種類であつて、爾餘のものは主に地方的な特殊品を使用ものが大半で茲に詳記する餘裕をもたないことを遺憾とする。

## 三、織物發達の道程に就て

### (A) 紀元前の埃及と希臘の織物

リ、アン・エヒラー氏は其近著「人類の風習」に麻布の未だ發明されなかつた太古の埃及人は野生の紙草を以て莖を編むてゐたと書いてゐる。實際に於て原始型の織物はこれ等の編物から發足したものと見て好いので、織物發達の道程を簡明に云ふならば

- (イ) 手織平織生地期
- (ロ) 同色無地又は簡単な圖様を描き。或は刺繡をなせる時代
- (ハ) 縞織物期
- (ニ) 簡單なる縞織期
- (ホ) 紋織物期

各國共、各種の織物原料とも大体は右の經路を以て發達してゐる。(イ)、(ロ)、(ハ)は凡そ近似的に發達し(ハ)より(ニ)に移るには可なりの文化の距離があり、更に(ホ)にまで進むには餘程の時間を経過せねばならぬ。而して紋織期と一言の下に總稱するもの、その種類と組織の複雑さは想像に餘るものがある。縞織期と紋織物期との歴史が紀元一世紀より今日に及んでゐると稱しても好い程に永い。

### (ハ) 模様染期

所謂捺染で日本在來の方法から云へば即ち友禪染の類である。この問題は別項を以て詳述したい。埃及ペニハーン遺跡のケティ墳墓に彫られてゐる「紡絲」並に「織機」に關する數個の圖は約五千年前の原始的織物期の好個の記録であることは前述の通りであり、埃及十二朝頃までの木乃伊の麻の巻布が主として(イ)及び(ロ)の時代に該當するものと肯定せねばならぬ。織物史中最も興味深く、特に研究を要し、發達の歴史の長いこと、産地の廣汎なことに就ては縞織がその一つであらふ。未開野蠻な人種の中にも、開明進歩の文明人の中にもそれぞれの創造性をもつものとして吾々はこの縞織に注目する。



紋織の存在のない太古にも数多く「麻に描かれた繪畫及び模様」のあつたことは埃及の遺品を見ても明かである、有名なアニの「死の記録」はその代表的作品で三千七百年を測ることが出来る、これはやがて「模様染」の先驅であるとも云へやう。

茲に一つの驚異が遺されてある、それはやがて吾々學徒に對する驚喜でなくてはならぬ。一九〇三年二月にデービス氏等によつて埃及テベス遺跡に於てトトメス四世の墳墓から麻の織織が發見されたこと、今から三千四百二十六年及び三千四百七十六年前に埃及の地中深く埋められた、トトメスの織織であつて現存の世界最古の織織である。この織織は全部麻製で三點ある、勿論白地に赤、青、黄、綠、及び黒の色糸を以て織られた蓮花と美しく開花した紙草の配列が織込まれてある、三つの中の最大のものは(寸法幅十一吋四分一、長さ十六吋四分の三)下部に青色で第十八朝のアムノテス二世の別名が織込まれてあり、最小のものには(寸法約四吋四分の三×一吋半)トトメス三世の別名(メン・ケル・ラア)が織込まれてある。

織糸は云ふ迄もなく緯糸で組織され経糸に比してや、太い糸糸を用ひてゐる、青(藍染)と赤(トルコ赤)とは未だ生々しいばかりに鮮明で三千年の星霜を経たとは思へない美しさを保有し優秀な埃及人の科學的智識を偲はしめる。ペトリー博士は之れは或はシリア織織でないかとの疑問を存せられてあるが、WGトムソン氏は明白に縦織機で織つたものであることを力説されてゐる。實際に於てケティ墳墓の織織の圖の一はこの縦織機で織つたものであることを以て既に五千年前に織織が存在してゐたことを想像せしめてゐるのであるからシリア産説は根據が少くないと思ふ。この三個の織織は目下カイロ博物館に秘藏せられてゐる。(同館型録番號、四六五二六、四六五二八)そして組織上の構成は埃及織織の黄金期であるコプト織(三、八世紀)がその直系を傳へ、希臘やスカンディナヴィヤの織織と凡そ同一法である(第貳圖参照)

トトメス織織の次に古い現存の織織は露都レニングラードの考古館に藏せられる希臘織織でクリミヤのクーパーンに於て一八七八年に發見した西暦前四百年頃のものに推想される麻と毛との混織品である。クーパーンは往古希臘の殖民地であつたのである。次に一九〇三年羅馬サンクトラム寺院の聖壇の下から發見せられた刺繡を配した麻製羅馬織織が古いものである。この希臘及び羅馬の織織は時代としてはトトメス織織より千年以上新しいけれども一は毛糸を應用せること一は刺繡を加味せることに於て世界の珍品とされてゐる。

イスラエル民族は漂泊の民であつて甲地より乙地へ文明の都市、宗教的な聖地を巡歴してゐる間に各地の織物に接觸したと見えて舊約聖書の出埃及記には、藍、紫、緋の色糸を以て織つた窓掛、幕、寢床被にこれ等織織を用ひたことが書いてあり、特に興味のあるのは天童の像を織込んだものを彼等漂泊の旅の天幕の扉に掛けたりした事柄である。(出埃及記二十六章參照)これを以てしても紀元前に既に織織の術が一般的に普及されてゐたことを裏書するものでその原料は常に麻が主で毛糸が偶々混ぜられ、刺繡や編物がこれに配せられてゐたのであつたらしい。

三世紀から五六世紀に至る間は所謂基督教があらゆる迫害を耐えて猶太を中心に羅馬、埃及の國々に深くその信仰の力を培つた時代で、これが織

織の上にも影響を及ぼし埃及コプト織の最盛期を生み、羅馬織織の大發達を招致し何れも基督教的な文様、象標を表はしてゐる。これ等の時代相は宗教的に清淨潔白であること信じられてゐた麻布に代ふるに、麻、羊毛の混織が多くなつたこと、即ち経糸には強靱な麻糸を用ひ、模様を表す緯糸には染色の自由な羊毛を用ひたものであつた。(第貳圖)

溯つて希臘織織に就て一言せねばならぬ。埃及文明の影響を受けて開發せられた希臘の織物は深い意味に於て後世の世界織物、特に歐洲織物の母である、希臘織物の中心地はサイブラスであつたらしい、サイブラスの位置は埃及、シリア、土耳其、希臘の諸列強に圍繞された小亞細亞の離れ小島である、即ち各地文化の折衝地點に位置してゐる關係上太古より種々の工藝技術が發達してゐた。WGトムソン氏は同島の有名な希臘織織の人名を發表してゐる、アセタス及びヘリコンがそれ等である。神々を祀るパルセノン神殿はこれ等の織物で飾られてあつた。クロンシヨール氏は云つてゐる。ホームマーのイリアッド・オデッセイの詩には有名なネロープ夫人の織機の話があり、チユイシーより發見せられた希臘陶器の繪にはネロープとその夫ウリセスとの背後に織機が描かれてゐる、それは紀元前四百年頃のものである。そして希臘に於ける織織の文様は希臘陶器の繪畫に數多く現はされてゐるので有名である。希臘織織の直系とも見るべきはクリート島に羅馬隆昌期より勃興したカンデイヤ織織、ロード島に興つたロードアン織織などはピザンチンの影響をうけた希臘文様を以て神韻掬すべき簡粗、豪放なアカンサスを表したのが多い(第八圖)すつと後世にはクリミヤ織織が發達したがそれは勿論希臘殖民地であつただけ希臘文様、その技術の傳承の大なる力があるが露西亞と云ふよりも土耳其織物の影響をうけた豪華な金糸銀糸を用ひた麻及び絹の織織である。色彩の配列を巧みに取扱つた土耳其風、文様の簡明なごつしり落付いた希臘風のこの織物は一種の魅力のある特異な境地を開いてゐる(第五圖參照)

茲に注意すべきことは、希臘織物と云ふもの、その中心は希臘本土にたくして常にその領地又は殖民地に發達したものが多く、それが遙か距つた本土に將來されたもので、結局希臘の大文明に育まれ、接觸し、その勢力の傘下にある特殊の土地に起つた工藝であること、その依つて來る處は埃及、シリア、波斯、土耳其それぞれ古來固有の技藝の上に深い根底のあることを物語つてゐるのではないかと思はれる。

## (B) 羅馬の織物

希臘文明の繼承者は羅馬であること云ふ見地から織物にしても希臘風のものゝ頗る盛大になつたと推想するのは大なる誤謬である。前述の如く希臘織物は希臘本土に發達してゐない爲め、希臘は領土も勢力範囲も異羅馬に、希臘に現れたと同じ立派な織物が最初からあると思ふのは早計である。實際に於て羅馬の初期はその人民鬪争を愛し、性格も單純で、藝術も表面的であつた、それが平和が續き國礎が安定するに従つて深まつて行つたのである。織物も羅馬としては必要なものであつたには相違はないが、専門的に記録されるものは無く、高級品は悉くパピロン、埃及、波斯、印



度から輸入し、野蠻なゴールの織物すら遠くから羅馬へ移入した。それが羅馬の盛時する頃には國內の染織、刺繡が擡頭したのである。これは羅馬の史家ビレニアスの記録にも明かである。皇帝ネロの如きは英國の金貨に換算して當時一萬六千磅以上の外國織物を買入れたと稱せられる。羅馬のコロシウムを飾るためアポロミ彼自身が空を神車にまたがって馳せる綴織を注文したと云ふ逸話が遺されてある。

羅馬に實在した織物は皆無である云ふのではない。日常の織物は各家庭で女の奴隷(異邦人又は異教徒)に織らせ、それを市のマーケットで賣らせるのであつた。羅馬神話の中にも女神パラス及びアラクネは織物の神であり、アラクネは即ち蜘蛛の意である。

羅馬綴織は次第に刺繡に勢力を奪はれて行つた。その組織や機の種類は希臘と同じく縦式であつたらしく、著しくスカンディナヴィヤのものに近似してゐる。スカンディナヴィヤ綴織は餘程その時代より有名なものでウオルスング・サガの「エツダ」の詩は之れを唱つてゐる。羅馬の刺繡は後世の伊太利刺繡となり、織物は燦然たる伊太利紋綴織となつて一世の耳目を驚かすまでの大發達を遂げたのである(第拾圖伊太利刺繡参照)

### (C) コプト織

世界最古、最高の文明を有した埃及も紀元前三百年よりクレオパトラ女王の死(紀元前三十年)に至るトレミー朝に於て衰亡の徵見へ、その獨立は事實上羅馬に奪はれ、フアラオミアマメン・ラーの祭政一如の國は澎湃として波及する基督教の力に征伏せられ、新しくコプト藝術の發祥を見た。約七百年間を過し、有爲轉變を重ねつ、亞刺比亞の勢力下に執政され、再度、回教の蹂躪に委し(八百七十八年間)更に土耳其に政權を握られ(三百六十五年間)奈翁の攻略に遭ひ、終に一八八二年に英國の保護領となり今日に至り餘喘を保つ状態である。今茲に論ぜんとするコプト織は右の中左記の時代に屬する。

第一期 グレコローマン時代

第二期 過渡時代

第三期 コプト極盛時代

第四期 回教時代

第五期 土耳其式時代

グレコローマン時代はトレミー朝末葉より三世紀初期に至る純希臘式のものや前期とし三世紀より五世紀に至るグレコローマン風のものを後期とする。當時の遺物はカイロ博物館を初め英、獨、佛、埃、露の各都の博物館に纏められ、我國にも武藤山治氏によつて集められたものが鐘淵紡績の山科絹布工場所屬の織物研究館に多数珍藏せられてゐる。

埃及の丁字型寛衣である麻製のチユニカは全く希臘のものと同型であつて、その初期のものは紫系を以て綴られた唐艸模様を簡明に袖口や双肩より一直線に裾まで達する様に織られてゐる、女子用はや、曲線を多く使用してゐる。稀れに毛糸を以て綴つてゐる。地は凡そ全部が白麻地で、絹を使用した数例を見るのは一の驚異である、その一は肩飾りの方形で中央の圓内には騎馬童子が織られその周圍には鳥魚が嬉戯してゐる例がある(ピクトリア、エンド、アルバート博物館蔵)

希臘文様の獨特であるアカンサス模様は盛んに使はれてゐた。

上部埃及のアクーミンはそれ等コプト織物の中心地であり、遺物の多くはこの地方から發掘される。初期のもの程單純であり、紫が主色で赤、黄、藍が使はれ模様も角、線、圓、星形、組紐形、更紗風の唐艸等幾何學模様が主である。中期から後期にかけて神話を取扱つたものが多く角形の中央の圓内に裸形の神々の群像や、希臘風の腰衣を纏ふた裸体の女神達が、種々な活躍の像を表したものがあつた。騎馬狩獵圖が特に多い、これはベトリ博士の説の如くアラビヤの系統を有する圖様であると思ふ、恰かも吾が正倉院御物の騎馬狩獵の錦織と相通するものがある。動物、花鳥、草木、唐艸を初め軍人、舞踊、嬉戯する人物などを織つてゐる。人物の圖の數多いのは云ふまでもなく希臘の影響のみならず埃及人固有の資性であらふ。動物としての獅子、馬、山羊、兎、魚、鳥の類、草木としての葡萄、蓮、紙草、蘆、薔薇、花籠、植木鉢、アカンサス等比較的活動性を帯びてゐる。過渡期は五、六世紀に盛行した基督教的標號を多く取扱つてゐる。即ち前時代の技巧が延長されたものでたゞ信仰の變化によつて、從來の純埃及風や希臘風が無くなり基督教的に變じたのが特長である。従つて前時代の如き古拙な趣は輕浮、織美になり、剛毅な處が柔和になり、靜的が平調を破り、單彩が多彩に變つて行つた。六世紀中期には著しくコプト式の「聖書的」な圖題が増加した。勿論生地にも毛糸の使用が多くなり、綴織のみの前時代に比し紋織物が出現してゐる。即ち生地の適當な部分に模様を色糸で縫ひ織出す驚くべき技巧の發明である、アクーミンの遺跡より發見されるものが多い。

基督教的又は聖書的ミユムコは十字架模様や基督の標號であるX及XP又はP、或は魚の畫、更に活動的な天使、天童の飛行の圖、僧侶の群像などがそれである。

コプト時代は埃及染織の最興隆した六、七世紀に涉つてコプト人を中心として發達した時代である。この時代はグレコローマンの影を没し變態的な文様が擡頭した頃で、純粹な感情をもち、ヘレニズムの精神と藝術を理解したコプト人は信仰の關係よりこれまで社會の表面に立ち得なかつたのであるが世相が基督化するに従ひ時勢を得、内に培はれた希臘風を再び復活せしめることに努力した、新興の氣は埃及の天地に充ち、隣邦諸國の藝術を快よく甘受した。

コプト染織隆昌の因は(一)グレコローマンの純粹な復興、コプト人の精神とその純情、(二)隣邦亞細亞諸國の藝術の影響と新進、活潑なコプト



人の精神(三) 根底深き基督教に對する信仰等に歸すべきである。特にアラビヤ、ペルシヤの交渉と藝術の移入は次の時代の中心勢力となるのであるから等閑視することはできぬ。當時のアラビヤ及び波斯は埃及人と異つた意味で高級織物(こゝに絹織)に秀でた民族であつたからである。刺繍と染色の發達はこの時代の偉大なる所産の一である。絹の色糸を以て克明に麻布上に聖書中の人物を刺繍した遺品が頗る多い。それに完成された織物はこの時代のものであると斷定してよい、技術の進歩、染色の自由、圖様の卓越は波斯織や支那織錦と比肩し得るものであると思ふ(第參圖参照)

この時代に驚くべき一の奇蹟がある、それは模様染の創始である。それに就ては後述するが、文様を完全に生地の上に印花し染色することを發明した、否發明ではなく波斯からの傳承かも知れない、それが今日の捺染術の濫觴をなしてゐる(第拾壹圖波斯繡繡参照)

七世紀の頃よりアラビヤの一角に起つたモハメッドが回教を創始し順次勢力を張りコーランと觀を以て四隣を風靡し六三五年ダマスコを首都としペルシヤを征し、シシリーを合し、印度及び遠く西班牙をもその勢力下に治め、基督教の本據であるエルサレムをすらも回教化した。漸次衰亡の傾にある老大國埃及が其攻略を防ぎ得る理由は更になかつた、そして完全に、又何れの國よりも先に六四一年に彼等に統治權を委ねた。かくしてビザンチン文化は廣大な歐亞の地に擴布されたのである。七世紀中葉以降、吾が埃及の織物及びその文様の中に從來の基督的、聖書的な影を没して、アラビヤ風の回教藝術||ビザンチン藝術||が之れに代り、曲線的な、左右相對的な、所謂アラベスク模様が發達した。根底より埃及本來の藝術様式を奪つて十世紀に及んだのである。

十世紀以降は回教藝術がサラセン様式をとり、土耳其の勢力が埃及に波及し著しく多角的に變化に富んだ幾何學模様風になつてしまつたのも亦た止むを得ない時代の推移であつた。かくの如くにして隆昌を極めた埃及の文化も、織物の母も稱せられた幾多の光彩ある歴史も深く地中に永遠に埋没され終つたのである。

D 秘魯織物

世界織物史の中に逸することの出来ない一つの奇蹟的存在はペルビアン織物である。その組織、織物原料、染色方法、構造などはすべて埃及コプト織と全然同じもので、たゞ現はされた文様のみが何物にも掣肘せられない秘魯固有の獨創的な圖案である、即ち巨石文明のもつてゐる粗野と稚拙さが巧に表出されてゐる。巨頭をもつ鳥又は獸類、幾何學的に圖案された鳥獸人物、波頭紋、星形、雷紋に似たジツグザツグ。埃及の象形文字にも示されてない多様な、自由畫的な圖案、それ等は皆織織となつて遺されてゐる。海岸の近くの地中から發掘する、それ等は千年以上を経過してゐるものである。或學者の如きは紀元前四、五百年にまで溯つてゐるが、吾々はそうまで古く溯る確證を握つてゐない。

一五二九年にピザロが秘魯に到着した時は既に驚くべき木綿や麻の織物の發達してゐるのを見たのであつて、云ふまでもなく西班牙人が同國を征服せない前の所謂ノン・インカ時代のものであることは云ふまでもない。

交通の不便な古い時代、地球が扁平なものであると信じてゐた舊時代、歐亞以外に南北の亞米利加と云ふ大陸を知らなかつた時代にも、航海を愛し、漁業を生業とし、交易を好むた印度人は可なり古い時代から南米諸國に私交を結び、或は漂着によつて或は交通によつて印度の文物をこれ等の國々に移植したものでらしい。そしてそれが獨自の古代文明を有してゐたノン・インカ(或はブレ・インカ)に傳はつたのは明かに紀元前である(クラウフォールド氏)木綿の現存遺物として最古のものは寧ろ印度より古いものがある。埃及との關係も同様であつて、彼此の關係は未知のまゝ、十數世紀を過ぎてきたのであつた。

秘魯人こゝにインカ前の民族は農業を主とし、耕作、植林の術に優秀な技能をもつてゐた、それはやがて染料植物の特殊な發達を招いた原因である。勿論氣候風土がそれに適してゐることは云へこの民族の植物栽培上の智識と熟練は、終に秘魯を染料植物の原産地たらしめ、引いては染色にも特技を成長せしめ、捺染すらも行はれたと云ふ驚くべき事實を吾々に教ふるに至つたものである。紐育市の亞米利加博物館に藏せられる紀元前後の多數の織物とこれ等染色、捺染に使用された器物を見る時には何人ともそのインカ前時代の彼の文明に吃驚せないものはないであらふ。捺染に就ては更に後述の事とする。(第十四圖参照)

E サツサニアン織物

紋織、こゝに絹布は埃及の上代にはまことに稀れであり。その稀れなものは波斯方面よりの輸入による貴重品であつたことは前述の通りである。波斯の太古のアクメニデイ朝より約四世紀は織物の最も發達した時代であつた。二二六六年にバルシヤ人を放逐したアルデシールは茲にサツサニアン朝を樹立し波斯古代文明を建設した。彼等の絹織物の特長はその圖様が、人物でも動物でも常に左右相對的である。そして好んで圓模様を使用したサツサニアンの國民性は常に活動的で、遠隔の地と雖も耐忍持久の精神を以て隊商を組織して、間接でなく直接に各國と交易、通商を行つた、それ故絹は直接支那より輸入し、紋様も支那、印度、希臘、埃及、アツシリアの影響を抱擁してゐる。

常に圓紋模様を特長とし、その圓内には鳥獸、人物を描き外には唐神を配して圖案上の均整を保つてゐる。六世紀頃の古い遺物は簡粗であり、力強い。色彩も單調であり絹と麻との交織であるが、この時代にすでに騎馬狩獵の圖が現はれ、東しては支那に、西しては埃及にまで同型の文様を傳へてゐる、法隆寺にある御物の騎馬狩獵織と根本的に何等變つた處を見出さない。九世紀初頭にレオ三世がカル、大帝に贈つた大紋の絹織(錦)は有名なものでアキス・ラ・チャベルの王の墓から發見されたものでチリアン紫地に大圓内に美しく飾られた象の圖が左右相對に配置されてゐる。こ



れ等は決して庶民に用ひられたものでなく上流社會に高級なものとして珍重されたもので、その一例は織機がビザンチンの宮廷の一部に据つけられ、國家保護の下に織つたものである。金糸、銀糸は波斯より、絹糸は支那より輸入を仰いだ。ダルハム寺院から發見した聖クースベルトの死屍をつ、むだ無數の織物の中に驚くべきサツサニアンの錦織があつた。彼は六八七年に死んだのであるが、紫ミクリムソンの地色で模様は金糸を以て織つてある、直徑二尺ばかりの大圓内に、魚と鷺とが情戲する水の上に靜かに王座が置かれてあり、椽には葡萄の房で飾つてある目覺るばかりの立派な錦である。それが十、十一世紀以後になると圓内は鳥獸人物の代りにサラセン風を加味した曲線の多い唐艸となり圓の椽が互に密接して所謂立湧式の整正な型式となりやがては初期獨逸、伊太利の織機様の先驅をなしてきたのである。

F 波斯と土耳其の織物

波斯と云ふ名稱は八三五年アツシリア王サルマナサル一世の時に初めて表はれてきたのであるが、吾々の云ふ波斯織物をもつて廣義なものとして見て好いので、北は裏海を距て、露國と境し、西は亞刺比亞、東は印度を限つた古エリアン族の土地に榮えた文明に育まれたものを總稱する。即ち前項に述べたサツサニアン、或は現時は亞細亞土耳其領であつて古代の大文明國であつたアツシリア、バビロニア、若くはビザンチンの一部すらも包含するとも云へる。故に土耳其織物とは不離不即の關係にある。

埃及と相對する大文明がこの波斯、土耳其の境に建設されそれがアツシリアであり、バビロンであつただけに、埃及や希臘の影響が大きい。そればかりでなく希臘の直系が羅馬であり、それが降つてビザンチン藝術を創始し、一面基督教の發祥地であるパレスチナを領し、回教藝術の搖籃地である亞刺比亞に隣り紀元前數世紀より十三世紀に涉つて世界文明の中心地であつたのである。有ゆる精神文明と物質文明が大なる交響樂を奏して燦然たる美術、工藝の百華を開いたのである。希臘が亡びた後、埃及が死屍になつて轉がつた後、羅馬が水平線下に没した後歐亞の廣い天地に思ふ様鳳翼を張つて天下を奪つたのは彼等の國家が尊奉した回教藝術であつた。

紀元前後に涉る彼等の織物に就ては一再ならず既に記述してきたので今はその繁を省略する。

土耳其はその歴史の示す如くハーンズ、モンゴル、ホングロア等と稱する固有民族と支那トルキスタン、露西亞トルキスタン等の民族の混血であつて大オスマン族を構成してゐる。これ等の民族はそれぞれの固有の藝術を以て互に咀嚼してゐるので多分に支那の影響をもつてゐる。波斯が印度の影響を傳へて埃及、土耳其に移し、土耳其が支那の影響をうけて波斯、希臘に傳へたことは著名な一例である。

歴山大帝の印度遠征は單なる希臘と印度との交渉でなく、波斯、土耳其に甚大な藝術上の問題を投げて行つた。

之れを約言するに紀元前後の彼等の民族の織物は精神としては埃及、希臘、アツシリア、バビロンの文化を傳承し、固有の模様を基調として絹は支那より、木綿は印度より、麻は埃及より移入し東西兩洋の技術と原料を巧に驅使し茲に完全なる織物王國を築き出したのであつた。

波斯は七世紀の頃亞刺比亞、土耳其、モンゴル及其外の小國を合する大國となつた、それは何れもモハノツド(五七〇—六三二)によつて起つた回教の力でも稱すべきであらふ。この時より織物は長足に進歩したと見へる。

波斯織の圖様は美はしい花紋である。石竹、ヒヤシンス、チュリツブ、薔薇、菖蒲、石榴、松、杉草、棕櫚の類のこの地方の沃野に生ふる花卉を微妙なる線を以て現はしてゐる。そしてそれを寫生風に單獨に描くことを特徴としてゐた。紋様配列のリズムは純真で、整正である。色彩は生々して自然の色を自由に消化應用してゐる。第六圖はこの意味を最も明白に示した適例である。第十貳圖も波斯の影響の甚大なる一例であるが葡領印度の産である。

時代が少し降つて支那の感化が著しくなつたものはや、形式が複雑になり、あるもの、如きはその區別に迷ふものすら出来てゐる。十四五世紀のものになると鳥獸模様が可なり多くなり、左右相對的に裝飾化されたものになつてきた。云ふまでもなく錦織で金、銀を使用したものは多いのみならず、天鵝絨織物の存在は如實に波斯人の天才的織物家であることを證してゐる。

波斯紋天鵝絨は所謂金華山に類するもので最高級の織物の一つであつて國の中央のイエツ又はカシヤンで重に製作した、これが後世のイエツ天鵝絨織の初めである。それ等はより多く後世に歐洲の織物界に深甚な影を投げてゐる。

波斯の捺染は印度の蕭繹の傳承である、然し其初期のものはコプトと同じく織物はどの生彩、闊達な所はなく寧ろ種拙な蠻人の繪畫めいたものであつたが次第に進歩して立派な室内裝飾にもなるべきものを製作するに至つてゐる(後述の事、第十壹圖参照)

土耳其は波斯と同時代にその創造性のある穹型な立湧式のパンドに圍まれた華紋織が發達した、その圖様も波斯とは、同種の花弁類を用ひ、より曲線的により圖案的に(波斯の如く寫生風に獨立して植物を描いた時代は殆どなく、稀れにあつてもそれは頗る圖案化された配列の下に組織だてられてゐる。第參圖の土耳其刺繡織参照)變化されてゐる。即ち著しくサツサニアン系であつて吾々はこれを以てビザンチンの特徴としてゐる位である。従つて紋様の性質上波斯の華やかさに比し壯重であり、嚴肅であり余程宗教的である、オスマン民族の貴族的な一面をも見るこゝが能ざる。金銀を以て地を織つたもの、紋天鵝絨織などの存在は波斯と何等變りなく、寧ろ多大に彼より感化をうけてゐる。

斯る高級織物の中心地は何れも首都近く、マルモラ海岸のブルサ、ビレジク、ヘレケ、スクタリ地方である。けれどもその他の南方又は近海の諸島には何れも古代より開明の土地であるを以て土耳其織主潮の穹型紋と趣を異にした織物の發達のあつたことは云ふまでもない。茲にその數例を擧げて見る。



希臘文化を浴しその盛時の殖民地であつたクリート島及びその附近の諸島には一種のヘレニズム風の模様、例へば簡潔なしかしレファインされたアカンサス模様を織つた麻や絹織物が土耳其古上流婦人の裳に愛用されたことは七、八世紀の記録にある。第八圖のローデアン織はその代表的なものであらふ。ローデアン織は土耳其の西南海アードリア灣ミクリート島の中間にあるロード島に産する特殊織物で、クリート島のカンディヤ織と並び稱せられる希臘風の織物である。(第八圖参照)

サロニカは土耳其と希臘との境にある有名な史的遺跡であるが、茲にも希臘風の織物が發達した。主に麻を以て色彩に富んだ紋織が製造される、餘り技巧を凝さない華紋、羊毛や絹は紋を構成する部分だけに用ひられ、何等回教的な感化がない。(第四圖参照)

ダマスクは後世織物の表面に一種の陰影を生ずる紋織を稱して「ダマスク」と總稱せしめる程に名高い織物の主産地であつた、従つて土耳其織の穹型式華紋織は數多く製織されたことは論を俟たない、寧ろ西南土耳其、パレスチナ境邊の織物中心地であつた。紀元前より紋織を産した土地であつた。そしてその歴史の長い程、その種類の多かつた事は想像に難くあるまい。實際に於て土耳其織の一般から離れた絹織物、ここにそれが經糸で考案された緞入絹織物が、に製作されてゐる。緞は經糸を未だ機に整經せない前、模様に応じて部分的の紋染をする必要があるもので織物の技術から云へば餘程複雑な考究を要する仕事である。ダマスクはこの緞式絹織物の出現したのは従つて餘り古い時代でないらしい。現在では稀れに好事家の珍重する織物である。(第七圖参照)

バグダッドは南土耳其に於ける文明の中心地であり商業の叢淵地であり、しかも非常に歴史的な土地である。ここに産する織物は絹織物と天鵝絨であつて、ダマスクと同じく紋織を應用した絹織物が特殊なものとして製造される。歴史的な織物ではないが、この緞を應用する點は希臘にも埃及にも無かつた、極めて印度的な始源をもつてゐて、歐洲に近い土耳其に於ては絹織物があることは忘れてはならぬことである。(第九圖参照) 天鵝絨もその紋様に於ては近東風の香りの高いのであるのを見てもバグダッドの位置が、メソポタミア古代文明の遺跡の上に建てられてゐることに興味を覺へしめる。(第十三圖参照)

土耳其織を論ずる時に逸するこの能きないものはその刺繡と絨氈とである。何れも手工を以て細かい模様を構成してゆくのであるが、その技巧の精妙なことは驚くばかりである。刺繡が紋織物のある部分を補足してゆくことよりも、刺繡は初めから一つの特技として發達したもので大なる裂地に克明に隅から隅までいさゝかの手ぬき、省略なしに多くの色糸を使ひ分けて文様を完成する手練は印度の高級な描更紗よりうける感銘と同じである。(第十五圖参照)

絨氈は室内裝飾として缺くべからざるもの、回教の壯麗、華麗な室内に錦上華を添ふるべく生れたもので八、九世紀以後にその發達を見十六、七世紀を極盛期とされてゐる。その規模の大なること、文様の巧緻なることにはある意味に於て、すべての工藝品の中最高に位するものとされてゐる。

## G 亞刺比亞及び回教國の織物

既にコプト織物の條に述べた如くモハメッドの回教が七世紀頃より強大なる勢力を以てダマスコを首都とし(六三五)エルサレム(六三七)埃及(六四二)波斯(六四二)シシリイ(八二七)西班牙(七一)印度(九九七)等を攻略し又は統治し七世紀より十世紀に涉り強大な勢力を振ひ、悉く回教の信奉者ならしめその藝術を統一、向上せしめた。それ故亞刺比亞織物と云ふのは不適當であるかも知れない、寧ろイラスミツク及びサラセニツク織物と稱する方が適當であらふ。(第十六圖参照)

亞刺比亞人は前に暫々述べた如く隙商を以て文明の移入及び輸送をつとめた民族であつた。彼等の織物も自然物のあらゆる方面からその色彩と紋様をこつた。その本土は荒蕪たる砂漠に被はれ人心は寧ろ瘠瘠であつた。然しその周圍の國々の文明に刺激され、猶太、基督、回教の総合的な宗教的信念に深く内に掘り下げてゆき、終に回教時代には絹織物のまことに美しい織物王國の出現を見、夢見る如き亞刺比亞夜話の童話の如く輝かしい銀や金の織物及び天鵝絨が各地から織出されるやうになつた。今は波斯領になつてゐるが波斯灣に近きチラツがこれ等華麗な織物の發祥地であつたと云はれてゐる。

前述の如く往古のこの國はまことに廣大なものであつて織物の主産地も各地に散在して亞刺比亞自體のみにある譯ではなかつた。それで吾々は眼を廣く開いてそれを眺める必要がある。そして近代歐洲絹織物の先驅として先づ茲にシシリイ織物が存在する(第十七圖亞刺比亞産絹織物参照)

「シシリイ織物」は大體に三時代に分つて論ぜられてゐる。勿論それは極く盛大な時期について、あつて古くは三世紀以前にも達することができ、が今はそれを云はない。第一時代はシシリイ島が亞刺比亞人によつて征伏された頃に初まり大略八二七—一四〇年の三百年餘の間でビザンチン波斯、印度より優秀な技術者が渡つてきて主としてビザンチン式の圓形模様、縞模様、花鳥動物を幾何學的に又は唐艸風に配したものが多く、即ちこれ等の模様の連結は直線と曲線を巧に交錯せしめて無理のない極めて自然的な、様式をこつてゐる、この時代のもは支那とシシリイの兩形式を融合した模様を波斯で織つたものなごもあつて、世上所謂シシリイ織と稱するものにはこれ等を多く包含してゐることは注意せねばならぬ事柄であらふ。この時代の代表的なものは大英博物館や歐洲の有名な博物館に多數蔵してゐる。

第二時代はローチャ二世の頃から初まり、王は一一三〇年に多くの織工を希臘やビザンチンより聘しバレルモ市に於ける王立織工場(オテル・ド



ウ・テイラツ)を擴張したので有名であつた。高貴にして高價なこれ等の織物は絹と金糸を以て更に著しくビザンチン或はサツサニアン式の圓模様の發達を招いた。寧ろこれをこの時代の(十二世紀)特徴と見るべきである。然して圖案の取材も廣くなり橄欖樹、月桂樹、石榴、鷲、鴉、獅子、犬、兎等が正しい左右相對的に配せられてゐる。この時代の今一つの特徴は縦、横、斜各様の幾何學的な帶狀線の組合せ模様でその間に花鳥獸を程よくはめ込むことである。

第三時代は十三世紀の初期に初まつてゐる、配色と圖案は非常に自由を生じ、色々の紋章、城砦、太陽、月星、葉飾などが現はれ、新興の勢力の隆昌な佛、伊、英などから需用が盛になり多くの輸出を見た。云ふ迄もなくバレルモはその製造の中心地であることに變りはなく十三世紀のグラナダの王に至るまで王立織工場は繼承された。

シシリー以外の地、即ち波斯、シリア、埃及、西班牙等は圖案上の多少の差異はあるもの、特徴ある織物を製出してゐた。就中シリア織はバレルモ織と全く軌を同じくし王のカイ・クバードの名が現はされてゐる有名な裂が現存してゐる。

西班牙に於ける華麗なサラセン(回教)織物はコルドバの王の保護によつて十世紀頃より發達した。十三世紀中葉にアルハンブラ宮殿が建設され、こゝに多数の織物が飾られたが、この建築は有名なサラセンの代表的なものであつて全部が直線と曲線の巧みな配列によつて幾何學的に組立てられてゐる。これに相應すべく内部の裝飾である織物も鳥獸の模様はなく、唐艸風の植物が多く用ひられ、中には西班牙亞刺比亞文字で「わが君サルタンを頌めた、へよ」と云ふ意味の文字が織出されたのすらある。ダラナダ、マガラ、アルノリア、トレドなどが西班牙に於ける織物製作の中心地であつて、十五世紀頃は各々隆盛を極め今日に至つたのである。(第十八圖参照)

飄つてシシリーは一二六六年に佛蘭西のカル、帝の爲めに征伏されてしまつてから、さしも有名なバレルモ織物も終焉の時がきた。そして多くの優秀な織工は、その土地を棄て、對岸の伊太利に亡命した。かくしてシシリーの織物は浪び新しく伊太利にルツカの織物が芽を吹き出したのである。バルカンのブルガリアにも回教的な幾何學模様織が生じ土民の婦人用と愛用されてゐることもこの部分に逸することのできぬ織物である。(第貳拾壹圖参照)

#### 四、模様染の發達

吾々は茲に模様染に就て考察せなければならぬ時となつた。即ち織物の上に紋織でなく後からの加工で文様を染出す一つの技術で、例へば瓜哇の藤織の如く日本の友禪染の如く印度の木版染の如きものを云ふのである。模様染發達の大勢から云ふなれば大體左記の如き経路を辿つてゐる。

一、生地の上に顔料や染料を以て文様を描く繪畫的手法

二、模様の部分に防染剤を施し地色を染め模様を白く染め出す法及び其類似法

三、模様の部分を木版その外の方法を以て染出す方法、それが發達して捺染となる。

四、機械學の發達と印刷術の進歩にて機械捺染法が發明された。

右が何れも一色より多色になるに従ひ方法が複雑になり且つ相互が組合されて微妙な作品を作ること可なり多い。然し何れにしても模様染本來が繪畫的素質のみに立脚してゐるため、織物に現れた文様よりずつと自由なそして科學的な作品を示してゐることは事實である。

染めること云ふことと模様染と云ふこととを世上では「染」と云ふ字に囚はれて凡そ同じポイントであるが如く論ぜられ、又取扱はれてゐるが、それは大なる誤りである。一體染めることなしに織物は(太古の白無地期は別として)存在しないのであつて、染と織とは唇齒の關係がある。然るに模様染めは意圖が織物と全然異つて、織模様にも現し得ない文様を自由に、多趣に、種々な材料を大膽に使つて繪畫的效果を表すこと云ふのが本旨である。成程ある時代、ある作品には織模様の安易な模倣品として手早く染め上げること云ふこともあるが、然しそれは模様染の邪道であつて永く榮えたいめしはない。

埃及第十八朝即ち今より三千五百餘年前の頃の製作にかゝるアニの「死の記録」と名くる繪巻物風の繪畫は麻布の上に繪具を用ひて當時の藝術の粹を網羅したもので、前記(一)に該當する。模様染とするのは不當であるかも知れないが、布帛に繪具を以て繪を描くこと云ふ原始的手法を論ずる時には參考の爲め染織史の上に記録されても差支へないこと、信ずる。實際上、現存のものでこれ以上古い織物に加工(描畫)された例はあるまい。時代はズツと降るが吾が奈良朝時代の遺品中にもこの種の麻布に佛畫を描いたものがあり、中亞より發掘された宗教的な彩畫の中にも麻に描いたものがある。しかし純粹に模様染として取扱はるべきものは大正十四年春に奈良博物館で陳列された正倉院御物製地の中、彩繪、朱繪、銀繪、胡粉繪墨繪など幾多の例がそれである。絹布や麻布にその名の示す如き繪具を用ひて文様を描いたものである。云ふまでもなくその文様形式から見て支那唐より直傳法であつて、(佛教美術第六號拙稿、天平時代染織工藝に就て参照)この意味で南洋諸島に産する雲母更紗もこの部門に加ふべきものであると思ふ。

#### (イ) 臘蠟(BATTIK)に就て

グラチエル氏に従へばベニハッサンの墳墓に録さる、ホテツブ王妃及び王子シネムホテブの衣裳の模様である星形、山形、波形紋は紋織物でなくして模様染であるを力説してゐる。もしこの假説を信するならば四五百年前に溯ることができるのである。實際的な遺物から見て世界最古の模様



染は埃及コプト時代の作品で(二)の防染法によつたものである。紀元四、五世紀のもので圖様は多く基督教の人物を主としたものが多くガイエ氏等によつてアンチノエで発見されたものが有名である。(ピクトリア・エンドアルバート博物館)これは文様を木版に彫り、唐土、アラビヤゴム等を以て麻布に印花し十分に乾かし染色をして仕上げる文様の部分は防染され白く染ぬかれる方法であつて印度、波斯、暹羅、瓜哇等の藤織を規を一にし奈良朝の藤織と同法である。しかも奈良朝のものは年代から云ふも七、八世紀に相當するから埃及の製品と比肩し得る。

其の染色は主として藍である、マンチエスター大学のパーカー教授の分析によれば正銘の青藍である云ふ。藍の存在は既に紀元前千年以上の時代にクリート島のミノアン希臘染工の手によつて染められた記録もあり、ホーマーの詩の中にも暫く現はれてくる色であることを以てしても、茜根(赤)と黄色と共に最古の染料であつたことを知り得る。

羅馬の史家プリニウス(紀元七〇年歿)の埃及記行の中に比較的詳細な染色方法を記録してある、それによる埃及人の染色智識の優れてゐたこと、取扱方法の科學的なことは二千年後の今日の染法と全然同一なことに一驚を吃するのである即ちその大意は

埃及に於ける織物の染色法は甚だ注意すべきものである。先づ織物を平滑にする爲め磨擦し、漂白し、次に染料を完全に吸収するだけの媒染劑を以て飽和せしめ、然る後煮沸せる染液の鍋の中に投じて染色を行ふのである云々

即ち現在の吾々の採れる植物染料の二浴法であつて、パーカー教授は印度よりの傳來である云つてゐる。

今一つ埃及藤織で特記すべきはそれに使用した木版がフオラー氏によつてアークミンで発見せられたことである。これによつて從來行はれた印度波斯方面よりの輸入品である云ふ説を根底から覆し得たのである。吾が天竺時代の藤織には未だその原板が発見せられないことを遺憾に思ふ、けれども平安朝初期の摺文の木版が蠻給と云ふ名稱の下に東寺に所傳されてゐる云ふことは逸すべからざる資料である。

木版を用ふるにしても、用ひずして手で描いたにしても藤織で防染を行ふ藤織法の發祥地は私はパーカー教授と同じく印度であらふと思ふ。ヘロドタスが紀元前四五〇年の記録によればこの法が裏海の沿岸の土民によつて行はれてゐたことを誌してゐる。

印度の更紗に用ひる木版は實に織物を極めた線を以て彫られ、木を主材とし銅線を植込み或は銅板を以て作られてゐる、最古のものとしてパンヌ地方に発見せられた幾何學的な文様を彫つた陶製の原板はおそらく現存のもの、中世界最古に屬するものでないかと思ふ。南米秘魯に暫く発見された異形のテラコッタ製の陶版も有史以前の秘魯文明の遺物として紐育の亞米利加博物館に珍藏せられてゐる。勿論これは木綿が印度より傳來したと同時に傳はつたものと見られてゐる。

此種の模様染更紗、藤織が過去若くは現在に行はれた地方は前記の如く印度、埃及、秘魯のみならず支那、日本は云ふ迄もなく、波斯、シリア、土耳其、暹羅、比律賓諸島、亞刺比亞にまで普及され現今では瓜哇がその最も顯名な産地となつてゐる。何れも印度文明が亞歷山大帝の遠征以

後回教が歐亞の大半を席卷した時代に於て各地に流布したものであらふ。我國への渡來は云ふ迄もなく唐を通じたもので、後に徳川時代に至つて更紗のことを沙室染(暹羅染)その更紗屋を沙室師と云つたのは直接蘭人によつて印度、暹羅からの交易の路が開かれてからのことである。

「印度更紗は現在、過去を通じて世界各地に行はれてゐるすべての更紗の本源である」とはクーマラスワミ氏がその著印度藝術史に述べてゐる言葉である。ラクノー、バンデヤブ、ラチブターナ、マドラス、マリスタタム、錦蘭等は古來更紗の名産地である。ここにバンデヤブ州のラホールは特異な手法と珍奇な圖案によつて古來印度更紗に獨特な地歩を占めてゐた。その最高級なものは織物の綴錦或はそれ以上の手数を以て一々克明に蜜臘を以て繪を描き、一色毎に新しく臘を塗り更へ、頭髮の如き織物な線を以て自由に描く技術は實に優れたものである。最も高級なもの程版木を用ひず全部手にて描くこと即ち所謂描更紗であることは各國共に變りはない。何れにしてもその手数は驚くべき程で、尙ほ高級なものには金泥銀泥を用ひ所謂金更紗、銀更紗を製作したものである。第一圖に示さる、金更紗の如きは、整正、端麗なること實に近古印度藝術の粹である云ふも過言ではないと思ふ。(第一圖金更紗部分圖参照)更に第二十四圖の一例の如きは人物、鳥獸、草木の躍動せる姿、周圍の波斯風の文様と相調和し一個の模様染と云ふ工藝の範を脱し、額縁に收められたる繪畫の域に達してゐる。觀るものをして音樂的律調にひたらしめ、詩的情緒を誘はしむるものがある。實際に於て近古第十五、六、七世に於ける高級な印度描更紗は繪畫的な要素を具備することは恰かも、十六世紀白耳義の一角に起り佛國に發達した、ゴブラン氏創案のゴブラン織と共に、東西兩洋に於ける染織界の大なる一の誇であり、藝術界に強き一步を印した顯著なる功績である。

マリスタタムの更紗は著しく波斯風の意匠に富みそして波斯への輸出が行はれてゐる。尤も波斯にも上代より印度の影響を承けて藤織更紗の行はれてゐたことは前述の通りである。(第十圖波斯藤織の圖参照)スラートは蘭人の通商によつて近古隆盛であつた港市であるが、日本支那又は波斯等へ輸出する織物、更紗類はここに集まつたもので従つてその製作も盛んであつた云ふことである。

暹羅及印度支那(佛領)印度は支那の文明の折衝帯であるだけに古くから更紗は行はれてゐた、印度の染織が南部に發達せず北部に隆昌を見たのは風土、氣候の關係も甚大ではあるが材料と人文との關係及び他の文明國との折衝にも比例してゐる。然るに暹羅は炎熱に於ては南印度と同様の緯度にあるけれども支那との交通には必須の地であつた事と、純乎たる佛教國であるために庶民は敬虔、勤勉であつた。そしてこの國に表はる、更紗の文様は獨創性をもつてゐる強い言へば、佛教的な唐神風の曲線を以て構成した「生活の木」や枝花模様の縦横の配列であつて、この形式は南下した瓜哇更紗の一部に顯はれてゐる。蓋しこれは宗教的な連鎖であらふと思ふ。更に特徴すべきは佛像も見るべき暹羅風の人物の全身又は半身をこれ等の文様の間に點綴してゐることである。第二十四圖暹羅藤織描更紗はその顯著な好例である。

瓜哇の藤織に就て適確な歴史はないが、紀元三五世紀の間に木綿が初めて佛教と交通に依つて瓜哇に傳來したことは明かであり、これに伴ふて更



紗法も傳はつたと思ふのは當然であらふ。今から四五百年前はバタビヤ、スマーラン地方で土民の優秀な藝術品として、また瓜哇人、スマトラ、ポルネオ人等の日常の衣服として、更紗は非常な發達を遂げ蘭人によつてそれが發見され和蘭へ大量の輸入を見、和蘭、獨逸ではその優秀な土俗藝術の模造を試みたりして忽ちにして瓜哇更紗の名聲を擧げたのであつた。十七世紀初葉に瓜哇更紗が初めて歐洲に傳來してから以後は、臘縷法も次第に衰微の徵が見へたので和蘭政府はその保護と奨励とに努力した結果現今では往古の如き高級品は少くなつたが日常品は可なり産出を維持する様に恢復した。その高級品は臘縷法を使はずして蜜臘を銅製の小臺を有する臘筆内に溶かしてその細き尖端より出る臘液を以て描更紗を行ひ多色のものは印度と同じく何回も繰返し臘描きと浸染を重ねるのである。第二十四圖は瓜哇の描更紗の好き見本である。瓜哇更紗文様はや、暹羅更紗の風を帯びた。そして更らに取材範圍を擴げたもので特に用途に従つて文様を全然變へてある處、三角形のチグザグ模様などの間に花鳥を配したものが特徴である。臘で描き又は臘版を置くことは一般に婦人の仕事であり、男子は染色に従事してゐる。

古くからの習慣であるがこの種更紗の着衣は男女殆どよく似てゐる。大別するにサロン、スレンダン、サロンカバラの三種となるがサロンは男女の着衣でカインパンチヤンとカインカバラの二種類に分たれて前者は總模様で日常の衣服用であるが後者は遙かに上物が總模様ではあるが織耳から織耳に至るまで細かい模様が染出され三碼から四碼半位の長さ(幅四二吋)をもつてゐる。(第二十四圖参照)。スレンダンは主に婦人用で頭から頸へかけるスカート式のもの一般的に幼児を背負ふ(腋の下で)に多く用ひられてゐる。従つて模様も簡單で一八吋幅で三碼ばかりの長さである。サロンカバラは男子の頭をターバン式に巻くもので角形の布である。この外に婦人は時としてケムパンと稱する外衣を着ることがある。身體をグリスと巻くだけの腕や肩は露出されてゐる。これには稀れに優良な更紗を用ひる。現在ではラツサムが最も大量を製作する土地であらふ。

日本に就ける臘縷は前述の如く唐傳來の方法で天平時代を中心として盛に高貴なものを製作され、その遺物は正倉院、法隆寺その外奈良朝に既に存在してゐる古社寺に保存されてゐるが平安朝以降この方法は永く亡びたけれども近年に至つて鶴巻工學博士によつて絹布に復興され可なり流行界に賞美された。

(ロ) 絞模様染(蠟縷)に就て

原則に於ては臘縷と同じではあるが手法と意匠考案とが全然別箇なものにこの絞染及び蠟縷(板縷法)とがある。絞染は同じく印度にその根源があるらしくラヂブタナ地方ではバングナと稱し美術的な頭巾や手巾を古くから染出してゐる。そして有史前の秘魯にもこの方法が傳はりその數例が例の紐育亞米利加博物館に所蔵されてゐる。現在ではボンベイ又はアーメダバッドで生産されてゐる。これは更紗の如く工業的な組織でなく地方的工藝品となつてゐる。印度の絞染が臘縷と同じく唐を経由して我が奈良朝時代に行はれ、有名な蠟縷と云ふ名稱の下に多數の優秀な遺品を正倉院に

に遺して以來、平安朝、鎌倉時代を経、桃山時代から徳川時代に至り隆然と勃興し鹿子、匹田、目結、絞染と云ふ名によつて我國の上下を風靡し友禪、刺繍等の發達と共に黄金時代を現出し今日に至るまで所謂純粋たる日本式趣味として流行界の寵兒となつてしまつてゐるのである。日本の絞染を見るものは何人とも印度に根源をもつことを信ずることができぬ程度に國民性に深く培はれてしまつたのである。印度の絞染は極東日本に隆昌したのみならず比律賓、馬來、瓜哇、ボルネオ、スマトラ、更に北進して西藏、波斯等に及んだのであつたが余りにその發達は遅々たるものであつた。たゞ馬來半島、アーキペラゴ等に盛行した絹織物は印度の絹と同じく絞染の一分系であると思つた方が適當であらふ。

(ハ) 蠟縷(板縷)に就て

印度系ではあるがその發達は日本及び支那に於て隆昌になつたと言ひ得るであらふ。現存世界最古のものは正倉院その他の多數の遺品である。正倉院御物中には人も知る如く、印度式の鳥獸草木を染出し、後から彩色を施して色彩効果を多からしめてゐる。模様を表裏二面から見た同型の木版を彫り布を幾枚もこの版木を以て挟み強く結びつけ染液を注いで地色を染め、乾燥後版木を取外して模様を染めぬかしむる方法であるが、我國以外の諸國の遺品がまことに僅少であることを遺憾とする。しかしその起原は印度で千數百年來の方法であつたことには誤りはない。

(ニ) 木版更紗に就て

此れは前三項の如く防染法でなく型版を用ひて布の上に捺染をする方法で、ある意味に於ては臘縷に型版を用ひたものもこの部内に入るべきものではあるが一般的には型版のみにて直接模様を染出すものを稱してゐる。名は木版更紗と云ふもの、銅版、陶版、鐵版等あらゆる型版を綜合し、模様も各種のものを包含してゐるのである。

秘魯に於ける陶版(有史前の)は臘縷に使用したか、型版捺染に使用したかそれは不明であるが恐らくはその何れにも用ひられたものであると思ふ。それはその母系である印度に於ても同様であるからである。埃及でも紀元前數百年に木版を使用したことが判明して居り、日本に傳來した摺文又は階布と稱するものは十二、三百年前を経て居り其遺品も現存されてゐる。然し印度で最も盛大を極め、臘縷と併稱する、高級な繪畫的作品の出來たのは回教隆昌の十六世紀から十八世紀にかけてである。アンバーの廢都より發見せられたこの初期の優秀な作品はブルクリン博物館に數個所蔵されて居る。切支丹宗と共に日本に傳はつた更紗は實にこの木版更紗であつて支那人の所謂華布(印華布)であつた。現在アーメダバッド附近に産するものは極く安價なものに墮してしまつた。



歐洲に於ける木版更紗は印度木綿が歐洲に渡来せぬ前に於て簡單なものが傳はつてゐた、十四世紀初期には伊太利の一部に行はれ可なりの農民藝術品となつてゐた、それが十六世紀には大分發達を遂げ、十七、八世紀には獨逸、匈牙利、和蘭に盛大となり、英國でも續々工場が設立される状態に進んだ。一六九〇年にはリツチモンドに、一六八八年にはオクスブルグに、一七一六年にはニュチャテルに建設されたのを初め、十八世紀末に至るまでには維納、グラスゴー、ハンブルグ、伯林、ミュールーズ、デクセン、プロシヤ、ボヘミヤ、イワノウオ(露)等各地に隆盛となり木版捺染極盛期に達した、そして各國それぞれ獨特の色彩と文様を以て市場に角逐したものであり、優良な作品は織物界の偉觀となつたのである。そして各々和蘭更紗、獨逸更紗、土耳其更紗、露西亞更紗、伊太利更紗等の基礎を開いたのであつた。

(ホ) 經糸模様の織物に就て

型版法及び絞染法が布帛に發達した以上この方法を經糸に、或は未だ織物にせない經糸に應用することは人智の進むに従ひ、技術の發達するに従ひ考察されることは不合理ではない。絞染を經糸に應用してその節染風のものゝ織物の表面に現はしたものは絛織であり、型版法を經糸の上に施して後織物に織上げその文様の不規則な一種の風味を與へしむるものが經糸模様の(經捺染織)である。

其の元祖は絞染なり型版法と同じく印度であり、他の染物と同一經路を以て諸方に流布されてゐる。ラヂブタナーで出来る絛織物は矢絛風な頗る美術的なものである。日本へも古くから渡來して異常な發達を遂げ今日では絹、綿を通じて充分消化された日本式の重要な織物の一分野を築き上げてしまつた。ボルネオ、マレー、瓜哇等では高級な織物として今日尙ほ榮へてゐる。絛織は日本獨特な織物であること信じ切つてゐた近古の吾々の祖先は切支丹宗と共に蘭人が印度南洋の諸種の織物を長崎に舶載した時に絛織のしかも技術の頗る見事な品を見て夢の如く驚いたこと云ふことは興味ある挿話であつた。

經糸模様の織物は型版法の正流とも云ふべき馬菜、瓜哇に行はれ、一部波斯にも傳はつた。特に馬菜、アーキペラゴは特殊な圖案と色彩を以て有名である、童話にも出るが如き一種の種描な鳥獸、草木の文様を横段に配列して、それに南洋的な豊麗な色彩を交へたものは獨自的な製品である。(第二十五圖参照)

五、極東の織物

これまで暫々述べた如く東洋各文明國は世界に於ける織物の搖籃地であり、發祥地であつた。ここに印度と支那の織物は木綿と絹との原産地であ

るだけにそれ等の歴史は長く、基礎や根底は深い。茲に私は既に述べたことの重複を避けるために簡單に印度以東の織物發達に就て概略の説明を試みることにする。

A 印度及びその附近の織物

前記の如く(織物原料の史的考察 D 木綿に就ての項参照)印度織物發達史の大半は木綿織である。

チンツ、キヤリコ、ラウン、モスリンなどの諸種の木綿織の印度語が日常の各國語に用ひられる程普遍的でその根源の程も察せられるのである、吠陀の經文にも屢々織物のことを書いてゐる。

希臘の醫家クテシアスは紀元前四百年に印度から波斯に輸入された華紋織の美はしく賞美されてゐることを書き、同メガステネスも紀元三百年前印度に駐劄官として數年を送り且つ印度人の衣裳が金や寶石を以て飾り、巧妙な華模様のある薄布を着ることを驚異的に記述してゐる。羅馬の史家ピレニアスも埃及に行はるゝ進歩した染色法は印度に於て普通の方法であることを述べてゐる。かくの如く印度では既に紀元前數世紀に絛織や巧みにして驚くべき立派な染織が普及してゐたことを知ることができる。今より約二千年前の織機が構造に餘り變化も進歩もなく近古までそのまゝであつたこと云ふ事實は印度の上代の文化を語るに充分であらふ。

一、二世紀頃の所謂印度希臘期に降んであつた織物はダツカが中心地であつたらしい。ダツカモスリンの巧緻輕量なことは羅の如きものであつて十六七世紀の記録によれば、幅一碼長七十五碼位のものゝ重量一封度に過ぎないこと云ふことである。そして此處で産する細布には頗る詩的な名稱が附せられてゐる。「夕露」「流水」「王紗」「シモン」の如く「甘し」等の如く何れもその品物に應はしい感じを以て名づけたものである。この高貴なダツカ細布は賤民より王侯に至るまで好むて愛したものであつたこと云ふ。これはダツカ附近に一種の非常に細く長く光澤ある木綿織維が繁殖してゐた爲めであつたが今は跡を斷つてしまつた。華紋モスリンは絛織であることは云ふまでもない。

八世紀に回教がこの國に特權を振ふに至つて木綿は世界的に傳播を初めた。それまでは主として印度及び其周圍(極少數の例外はあるが)に木綿織華紋織、刺繡、厚織、縞、模様の等が勢力を伸張してゐた、五世紀頃のアチャンター窠院の壁畫にあらはれた人物の木綿の着衣等を仔細に觀察するとよく消息を知ることが出来るのである。

錫蘭木綿織はモスリンに反して柔かく且つ重い厚織で幾何學的、花鳥草木、ケルト風の模様が多く織られてゐる。南印度ではこの他金糸、銀糸を織込むだ美はしいものがベナレス附近、タンダ、コータ等に産する。そして純印度風の圖案による織物や神話や叙事詩的な題材を織つた高級なものも南印度のカルブル、バラツカコ、カラハストリー等から産する。



絹は紀元前四世紀に支那から傳來してゐる、そして主に北印度に産し多數優秀な紋織物があり、文様は波斯系統のものが特に發達し、ペナレスの織工などは十世紀頃に移住してきた回教徒であることを以てしてもその影響を知るに充分であらふ。金糸を絹織織に使用したのは彼等が初めてであつた。

花鳥動物を左右相對に配しアツシリア、サツサニアン風の東洋的な文様を基調とし生活の木、菱形模様、小枝華紋などの純印度風なものや、巧妙な組織と豊麗な色彩を以て華やかな織物を製造した。ペナレス、スラト、アーメダバド、ラホールが中心地であつた。尙ほカシミール地方には特に細い絹糸を産し獨特な紋織を産してゐる。

あらゆる印度の織物、ある意味に於て世界の織物の中で實に特異な、獨創的な、音樂的な模様と色彩と組織をもつてゐるのはカシミール織物であらふ。その技巧の細微なことは織物と縫取織との二種類を専門家すら容易に區別がつかぬ程度のものである。全く繪畫的な意匠で、尖端が柔かに曲線を畫いた圓錐形の鶏頭模様が最も普通である。原料はカシミール産の羊毛で、用途は毛氈、敷物、壁掛、肩掛、上衣である。

紋様及び織法は波斯と交通が開かれた千數百年前に隆昌の端を開いたのでサイプラスの織法の傳承であらふ。十八世紀まではピカネル、カーンダラ、アムリトサルなどのパンヂヤブ州の地方では余り毛織を産せなかつたのであつたが、一八三三年にカシミール一帯の高地に大飢饉があつて以來此の織物も衰へ前記諸地方へ移つてしまつたのである。前記諸地方と雖も昔時のカシミール織は出來ず實質本位の日常品を多く産してゐる譯である(第二十圖参照)紋様は希臘風を帯びた云ふ點、波斯古風を加味されてゐる點よりして前記の如くサイプラスの傳承であらふと論じたが茲に最も好い例を示すことが出来る。即ち第二十五圖希臘シヤルシスの華紋織と第二十圖のカシミール花紋毛織とを比較して共に相通じ、共に波斯風、サイプラス風の影響の著しい處を看取し得ることを、信する。

更に印度刺繍に就て一言を費さねばならぬ。カシミールの織物が織物と縫取織若しくは縫取織であることを見て感ずることは印度人の手工上の特性である。細かい技巧をおし氣もなく發揮することである。最もカシミールでは昔時は織物と同じく刺繍の名所であつたが、例の大饑饉によつて現在では平凡な、強烈な色糸を以て平易なチエナル葉の刺繍をするに過ぎない。恐らく錫蘭の木綿の鎖狀刺繍と共に印度に於ける最も民衆化せるものであらふ。之れに反してデリー、アグラ、ペナレス等の壯重な刺繍は印度らしいものである。金、銀或は玉、石を應用した細工は他に類例を見ないであらふ。ベンガル並に西部印度より産するカシタ刺繍は亞刺比亞系の襲取縫であつて木綿地に調和の好い柞蠶糸を以て上品な服飾品用の刺繍であるこれ等回教的な刺繍の中で最も洗練され、美術的なものはベルチスタン、アフガニスタン、チトラルの塊め細工入りの刺繍、ベシヤワールの襲縫、ホカラの模様刺繍である。何れも印度のバミール高原に接する極西北端、若しくは印度、波斯、露國の國境にある奥地に産する土俗的藝術品である、珍重すべく、保護すべく、亡ぼすべからざる歴史的の産物である。

塊め細工の刺繍は一つの織物の中に珍奇なる異組織の他の織物や金銀珠玉等を塊め、レースを應用し全體を刺繍を以て模様を構成した総合的なもので實にアフガニスタン、ベルチスタンの地方的特性を發揚したものである。(第二十七圖参照)ホカラ刺繍は世界のエンプロイダリー界に偉彩を放つものとして染織愛好家によつて珍さるゝもの、その極めて大膽なる手法で大形な草花を配置しこれを圍繞するに自由奔放な曲線をもつ蔓唐艸を以てし、細微な刺繍の一群塊とも云ふべき感じを與へる。波斯風の文様の影響は一面印度的な色彩と好く調和して獨特な作風を表してゐる。(第二十八圖参照)

印度の刺繍は殆ど家庭的工藝品であり、その何れもが男子の手によつて主になされることを特記して置く必要がある。

印度よりや、距離があるが波斯と亞細亞土耳其の北邊國境、裏海に沿へる露領コーカサス地方は古くより波斯の影響を深くうけてゐる。こゝに産する一種の毛織はかゝる邊土の農民藝術品としてまことに香り高いものである。幾何學的な模様様にその特色が現はれてゐる。(第二十九圖参照)

## B 支那日本及び其附近の織物

支那の絹織物の始源は餘りに古く、漢にして不明である。今から二千二、三百年前に既に龍、鳥、花等を意匠した錦が發達して居り、漢陽の都(成都)及びそこに至る揚子江沿岸又は廣東、福建附近には縞、紋織、經系模様染織等の技術が進んでゐた。

絹糸が既に四千年前に行はれてゐたことは當然同時代に織物の存在はあつた。たゞ高級な紋織は何時頃より始められたか、問題である。文字から考へると少くとも三千年前に錦綺、紋錦の字が行はれてゐたことは紋織物の存在も確認してよいと思ふ。そして我國へ絹織物を傳來したのは歴史の上では秦人、漢人が應神天皇時代の頃歸化したに初るべきであるが實際はそれよりズツ古くから韓土を通じて又は直接に支那と交通し、錦、綺、紋織も傳來したと思ふ。然し今では正倉院、法隆寺等古社寺の奈良朝以前の遺物が現存してゐないために的確な確味を缺くが、問道に紅錦と云ふ高級な紋織は奈良朝でも珍重されてゐたのであつたがそれ以前に我國に渡來したのかも判らない。そして文様の系統を見ても支那製らしく、御物獅子獵文様錦などの圖様は波斯の影響の大なるもので、人物の形相も支那人でなくアリアン系である、それが支那で織られて我國へ輸入されたものに相違ない。

吳、宋、唐の時代が恐らく極盛期であつたらしく、朝鮮でも、百濟、任那、新羅へ支那の工人が渡來し技術を教へたものであらふ。そして佛教渡來と共に染織物及び工人も更に輸入し奈良朝時代には可なり發達してゐたと思ふ。延喜式の制定などで更に組織的に進歩し平安朝の隆昌によつて京都が染織の中心地となり、鎌倉時代にや、行止り室町時代に復興しかけ安土桃山時代には非常な勢で進み、徳川初期に至つて前代末間の興隆を見て今日に至り支那傳來千幾百年の歴史の織物は全然圖様、組織共に純日本化し終つたのである。



支那奥地即ち四川省若くは遠く西藏に於ける上代文化は、常に揚子江によつて傳はり、その沿岸である四川、湖北、湖南、江蘇、浙江に植つけられてゐる。そしてこの各地に産する織物も系統的に相似してゐる、豪華な牡丹唐草、寶相華、雲綢、鳳凰、鳥獸花木などの模様が金、銀、黄、藍、緋、綠等の獨特な色彩を以て表はされてゐる。現在の秘密國西藏はその昔は秘密國でも何でもなく、常に成都と揚子江文明に深く呼吸し、そこに産する織物も特に異色ある文様ではない、たゞ印度に於けるカシミールと同じく一種の高原に産する山羊の飼育が盛であつてそれによる毛織物が特産であつた。(第三十圖参照)

この揚子江沿岸の織物が最も古くから發達した純支那國有のものであるとしたら、南部支那、ここに海岸に接する福建、廣東の織物は位置の上から常に外國の影響をうけた織物であること云ひ得る。それで前者の蘇州、杭州、揚州、南京、九江、成都(漢陽)は後者の福州、泉州、廣東と古きに於てはさう變りがないが文様が全然異つてゐる。特に廣東に至つては特異な發達がある。

廣東織は吾々の云ふ間道織がその本流で實に細き絹糸(これは廣東繭の特性である)を以て多彩的な縮織物を製出するのである。それが單なる縮織物でなく、又經絲の色系のみ配列によつて出来る簡單な縮織でなく、各種の複雑な文様を配置し緯糸を以て組織する縮織物などを製出してゐる。元來縮織物は印度系に屬し回教徒に愛好せられ或は木綿と共に南洋方面に傳承され、現在では縮模様は島から産する織物であるからかく名けられたこと云ふ解説すら行はれる位に南洋諸島に多く出来る。三、四百年前に之れ等が我が長崎に渡來して鹿比丹となりジャガタラ縮となり、聖多默縮となり奥縮、唐棧となつたのである。そして日本に植つけられたものが双子縮であつた。然るにこれが印度支那より北上して絹や織物の中心地に進むに従ひ複雑味と品位が向上して行く。印度支那の北邊暹羅國境のラオス(老樞)地方は有名な縮織の産地である。(第三十一圖参照)そして支那に入つてそれが廣東織、福建織となり我國に傳つて博多織となつたのである。廣東縮は我が奈良朝に輸入され正倉院その他に多數代表的なものが保存され聖德太子愛用の所謂太子間道などがそれである。福建になる縮支那固有のものとの折衝地帯だけ直線的な模様で諸々の効果を出してゐる。その影響は當然對岸の臺灣に及ぼされるべきである。臺灣は往古は豊沃な樂土として南支の人々によつて開發せられ、土俗的、民俗的に興味多い土地であるだけに織物、花莖等にも可い歴史がある、要するに福建直傳であることは肯定すべきである。(第三十二圖参照)

支那の文化の中心は南から、北漸し、揚子江から黄河を越へ滿蒙の域に達したのは蒙古民族が、漢族を壓迫して政權を握掌したことに歸因する。従つて織物文様の變遷の上に著しくモンゴリアン風を加味されたことは争ふべくもない。猛々しい蛟龍、雲綢を有する飛彩雲、文字の裝飾化、曲線を多く使用する割に多角的に見へる模様、黄、綠、青の強いコントラストの色調などがその特徴である。

蒙古人の影響とは一面回教的な外形を有する豪放な表現を云ふのである。波斯、中央亞細亞に接する蒙古が直接回教の威力を感じる程度は意外に

大きいものとせられてゐる。近時盛に論ぜられる北支の藝術の中に回教の影響の甚大であること云ふことは將にそれで蒙古を通じて西北より南下したものであらふ。第三十三圖の蒙古製紋織物の模様は回教的な好例を示すに足りる。

クラウフォールド氏は支那の刺繡は紋織物よりも早く發達の域に達してゐたと論じてゐる。それは揚子江沿岸の文化についてあると思はれる。まことに支那の織物の發達はこの點まで達してゐたかその極點を知ることが困難である。即ち吾人の今日の智識程度のもものは如何なる種類も方法も既に中古以前に存在してゐたからである。綴織若くは綴錦の發達程度は驚くべきものであり、そして刺繡がそれ等織物より更に細密巧緻で尙ほ古いこと云ふのであるから吾人の驚きは嘆嘆に變るのである。

支那織物の發達史、日本染織史、日支の關係経路などは今詳細に論ずる暇のないことを遺憾とするが、日本の織物は要するに支那が始祖であり、開發者であつて、平安朝以後に至つて日本の民族がその好む處に従つて母系紋様より脱化創作した獨特の日本模様によつて明治に至つたもので染織の手法は全然支那と同系であることだけは明白に云ひ得ることである。

### 六 近古の歐洲各國の織物

九世紀に於ける西班牙織物の隆昌は前記の如く回教藝術の餘澤である。舊都コルドワ、セザイル、グラナダはバグダッド及びダマスコの染織に比肩するばかり發展したと稱せられた程である。西班牙はかくの如く隆昌であつたが、一方和蘭、葡萄牙等海運術の進歩した國々はそれぞれ海路印度と交通し印度の織物や技術を輸入し、十五世紀以降その隆盛を見るに至つた。一は宗教的に一は通商的に何れも印度及極東諸國の織物が流るゝが如く西歐一流の文明國に注入されたのであつた。印度がかく列國環視の中心に置かれその天與の大富源を握掌せんと企てたのは和蘭ばかりではなかつた。(一六〇二年東印度會社設立)葡國、英國更らに佛國何れも東印度會社を組織して各國の市場と印度との結合を謀つたのである。これ等の國の織物が印度に啓發せられた甚大な例は幾多存在してゐる。特に西班牙のもの、如きは全然東洋の織物を見るに少しも變らないものがある。第十八圖のグラナダの紋織物の如きは未だいくらか印度離れがしてゐるが第十九圖の人物華紋織の如きは純然たる印度製と云ふも差聞へはない程度である、人物の形相、花樹の表現、かつ下段の刺繡をせるカシミール模様などがそれである。

葡萄牙も同様のことを云ひ得る第三十五圖の如きは顯著なサラセン式幾何學的模様である。

然るに一方回教土耳其王國に龜裂を生じたこと即ちパレルモ(シシリー)が十三世紀後半に佛國に領有せられ、の優秀な織工が對岸伊太利に亡命したことによつて佛伊の織物に炬火が點ぜられたことは特記すべきことであつた。

彼等は南伊のカラブル地方でも優待されたが、それよりも北伊太利のルカ地方で非常に優遇された。そして茲に有名なルツカ織物の興隆の基礎を



固くした。文様形式は著しき波斯風で動植物特に犬、羊、鷹、兎、石榴、葡萄、蔓などの正確な模様を金糸や色絹で織出したものである。しかるにこのルツカ織物もそう永くは續かなかつた即ち約五〇年を経て一三二五年にフロレンス軍がルツカを包圍攻略して多くのシシリアやルツカの織工をフロレンスに奪取してきた。それが今日に至るまで華麗なフロレンス織の濫觴となつた譯である。勿論フロレンスでは絹織物はこの時が初めてあつたが、毛織物はそれより二百年ほど早くから産出してゐたのであつた。

このフロレンス織物業者にベルチイ一家と云ふのがあり各種の織物を織り、工場をヴィヤドゥベルチイに建て繁昌した、この人が天鵝絨を歐洲に於て創めて織つたので、彼の名をこつてこの織物に冠したのである。ルツカ織工がフロレンスに來たことによつてこの土地は俄かに藝術の都となり南歐の織物の中心地となつた。十五世紀の終りには絹織業に従事するもの二萬人、毛織業に關係するもの三萬人と云ふ豪勢を示してゐる。フロレンス織物の隆昌期は約二百年續いた、一五三〇年法王クレメント八世によつて包圍された、この時彼が叫んだと稱する戲的な獨白「準備はさ、のへりやフロレンスよ！爾の金の唐錦をわれ等は劍の槍先を以て購はんがために來れり」によつてもその有名と富は素晴しいものであつた。フロレンス織の特徴は即ちルツカの繼承ではあるが特に眼立つのは、アーティチョークの果（バインアツブルの外形に似たる果物）を種々裝飾化した點である勿論天鵝絨は驚くべき出現であつた。

十六世紀の中葉からベニス、ゼノアは立派な紋織と天鵝絨が盛んになつてきた土耳其型の穹隆形な立湧式の中に百合、菖蒲の花を整正に表したものが織られてゐる。且つ花瓶又は壺の模様がこの時代に現れたことも特徴であらふ。

十六世紀末に至つて圖樣が一轉する傾向になつた、それは西班牙と繁激な交通の結果、流行が西班牙風に衣服の袖が狭くなつた關係であらふ。模様は小柄になり總模様になつた。(第十圖参照)

何れにしてもフロレンス、ベニス、ミランその外の各地に製造するものはかゝる歴史的な経路を以てゐるために、すべての點に於て相似するもの、その土地の特性をもつてゐることは知つて置かねばならぬことである。同様にフレミツシユ人の織物即ちブルヂユ、ガン、イブル等の織物もよく似てゐることは云ふまでもない。

参考の爲めに附記せねばならぬことは十三世紀に隆盛を奪はれたシシリーの紋織はこの時全滅したのではなく一盛一衰を繰返して、十七世紀頃には獨自な、寧ろ繪畫的な織物を産出してゐたことである。

佛蘭西の織物に就ては割合に新しい記述より能きないのである。十三世紀より十五世紀に至る間佛國はすべての藝術の建設の時代であつた、壯大なる王宮や寺院、それを飾る繪畫、彫刻は多くシシリア人若くは伊太利北部の藝術家によつて營まれたのであつた。織物も其例外ではあり得ない。一四八〇年にルイナ一世はツールに絹織工を招致した、一五二〇年にはフランシス一世は伊太利やフランドル人を多數招聘してフオンテンブロー王

宮の一部で綴織を織らしめた。リオン邑に絹織工場を建設した、これが後世終に世界絹織の中心地となつた基礎である。

アイリー四世が一五八九年にサボンネリーに既綴織の王立工場を設立した、のみならずブル宮殿の一部に多數の名工を宿泊せしめて織物を保護奨励した、そして一方にはジャン・ゴブランが巴里に十五世紀に建て、置いた綴織の工場に多數の製作をなさしめた。

ルイ十三世(一六一〇—一四三)の頃になるに従來の如く伊太利直系であつた織物に幾分か佛蘭人の個性が混じて左右相對的な形狀が破れ初めて來た、次にルイ十四世(一六四三—一七一五)になるミシャル、プラン、ジャンマロツト、ポートル等の有名な圖案家が輩出して宮廷の裝飾織物の意匠に創案を施した、文様の範圍を擴げ、より繪畫的なもの、名實共に復興期の工藝の爲めに氣を吐いた。(第三十六圖参照)

王歿後オルレアン侯攝政時代及びルイ十五世(一七一五—一七四)に佛蘭西更紗の様式に再轉の時が來たのである。それは主としてワットオその外の大畫家が織物圖案に關係してその創意を大膽に發表し、これを註文した人々もよく理解したからである。然るに佛蘭西大革命の間は絹織物、特にリオンは可成りの打撃であつた、そして同時に模様の上にも大なるリバイバルがあつた。

十八世紀中を通じて西班牙は佛蘭西風の紋織を多數製作した、一見區別のつかぬ程のものではあるが、西班牙のものは總じて色調が生々しく、絹はや、ガサガサして光澤が劣るを稱せられてゐる。

フレミツシユ(フランドル人)の織物の中心地は既述の如くブルヂユ、ガン、ワールネ、ルーベエン、コートレイ、オードウナルド、ブラツセル等であるが就中ブラツセルは王室用綴織を製し、ブルヂユは絹や天鵝絨で有名である。系統は初期伊太利系であること寧ろシシリー系とも見るべきであらふ。

フレミツシユは麻織物の高級品で今も尙ほ有名である、一四〇〇年の記録にガン市に於ける織工は四萬人、イールに於ける織機は四千臺であつたと云ふ。麻の高級な紋織は絹よりも尙ほ高價である。そして織維の細きこ編物、莫大小等に織られてその質の高貴を賞でられてゐる、第三十七圖の刺繡編織はその一例である。

十七、八世紀には多數の麻織は獨逸から製出され、その文様は人物、建築、花葉、鳥獸の類であつた。同じくフレミツシユ族でも獨逸のロン市は特殊な織物の一中心地であつたオルレフ織と稱する金糸入の織物で人物や聖書的な文様を以て小巾に織出してゐる、十五、六世紀に最も隆盛を極めたものである。

伊太利の復興期以後の紋織物が遠く獨逸の内部を浸透して佛國とは反對の方向に進みゴール人特有な文様を有するものに波蘭織がある。その古拙なそして様式的ゴツゴツしたところは洗練、端麗な佛蘭西のものに比し極端な距りを發見することが出来るであらふ。(第三十八圖参照)

現今ではチエツコスロバキア國になつてゐるがボヘミヤ地方の山地には土俗的に色々な風習の遺された土地であつて、例へば音楽にしても舞踊に



44  
44

しても獨特なリズムを保持し外界からの刺激等に影響されてゐないものをもつてゐる。織物などは何人とも雖も日常行使するのであるから、それと同一に論ずる譯には行きかぬが、多少の影響があつても獨自性を多分にもつてゐることは考へられる。カル、スパッドは古くから工業都市として榮へてゐたのであるがこの土地に製せられる市民日常の紋織物の中にはボヘミアの民俗藝術が多分に遺されてゐること肯定し得るであらふ。即ち簡単な幾何學模様それは回教的な影響であらふ、それを配して種々なる律調を有する縞を色々な色系を以て組立て、ゐるのである。(第四十圖参照)  
右の他英國、露國、スカンデイナビヤ、獨逸などに詳説を試るべきが當然であるかも知れないが、本書解題の目的が世界染織史の概観であつて、近世の比較的明瞭にして且複雑な部分は割愛することにした。(大正十五年九月山科村染草亭にて記)

(完)

大正十五年十月十日印刷  
大正十五年十月十日發行

編輯者 三浦秀之助  
印刷者 川面義雄  
印者 三浦義雄

發行所 大阪市東區高麗橋一丁目  
山商會  
(電本局 一八九七〇)

内の部百貳 號 第



終

